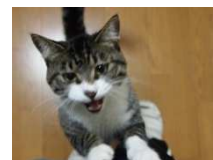


## とのちのオーディオルーム 補足資料

### 最高音質のシステム



2019/09/13

今までに試聴したオーディオ・システムの中で、最も高音質だったのは？

ここで紹介するオーディオ・システムは、完全にとのちの独断と偏見で選んだものです。選定基準に客観性はありません。

### 試聴機会について

子供の頃から東京近郊に住んでいるため、オーディオ・システムを試聴する機会は数多くありました。初心者の頃から通算すれば、数え切れないぐらいのシステムを試聴しています。

試聴する場としては、下記のものがあります。

- オーディオショップの店頭または試聴室
- オーディオメーカーのショールームまたは試聴室
- オーディオ関連イベント(真空管オーディオフェア、インターナショナル・オーディオ・ショウなど)
- 音楽関連イベント(レコード・コンサート、音楽講座など)
- ジャズ喫茶
- オーディオファイルの自宅

上記のいずれも数多く経験しました。

若い頃(70年代)は空前のオーディオ・ブームで、自分の行動範囲内に、試聴室を備えたオーディオショップ、メーカーのショールーム、ジャズ喫茶がたくさんありました。家で聴くより良い音で聞けるので、よく聴きに行っていました。

社会人になってからは足が遠のきましたが、90年代終わりに新しいオーディオ仲間ができて、再び試聴に出かけるようになりました。2000年代後半には、もう自作はやめてメーカー製にしようと考えたことがあって、特に足しげく試聴に出かけました。この時は実際に購入するつもりだったので、自分の聴きなれたCD/SACDを持ち込んでじっくりと試聴しました。

### 最高音質のシステム

上記の経験の中で、私の耳に最も音質が良いと感じたシステムを紹介します。まるで生演奏を聴いているような臨場感に驚きました。

意外にも(実はそれほど意外でもありませんが)、それはオーディオの専門家やオーディオファイルのシステムではなく、音楽ファンのものです。

それは、音楽同好会「ミュージック・トラベル」の代表者の方が所有しているシステムです。私が住む東京都瑞穂町の社会教育施設「耕心館」で、同会が2014年12月に主催したレコード・コンサートで使用されました。掲載の許可を頂いたので、写真を含めて紹介します。

#### システム構成

- レコード・プレーヤー (ADP) : パイオニア PL-30DL II
- カートリッジ : 日本ビクター (現 JVC ケンウッド) Z1-S
- CDプレーヤー (CDP) : ヤマハ CD-S300
- プリメインアンプ : 日本ビクター (現 JVC ケンウッド) A-X5D
- スピーカー : 日本ビクター (現 JVC ケンウッド) [型番なし]
- スピーカー・ケーブル : 日立電線 OFC ケーブル [型番不詳]

CDPを除けば、すべて80年代のミドルグレードのコンポーネントで構成されています。改造の跡も見られません。唯一、スピーカーの背面に手作りの端子板が取り付けられているぐらいです。

## 各コンポーネントの紹介

各コンポーネントの概略は、オーナーご自身から聞いたものではなく、「オーディオの足跡」(<http://audio-heritage.jp/>)などのウェブサイト調べたものです。写真は、私が2度目にミュージック・トラベル主催のレコード・コンサートに参加したときに撮影したものです。初回と一部異なる構成になっていたため、Z1-S、CD-S300、OFCスピーカー・ケーブルの写真はありません。

ADP：パイオニア PL-30DL II

ダイレクト・ドライブ・ターンテーブルとスタティックバランス型トーンアームを組み合わせたADP。1980年発売。定価59,800円。当時として標準的な仕様の中級プレーヤー。



中級プレーヤーとはいえ、この時代のプレーヤーは高級感がある。私のテクニクスSL-1200GRよりずっと高そうに見える。

撮影時には、Z1-Sではないカートリッジが取り付けられていた。音質はZ1-Sの方が良かったと感じた。

カートリッジ：日本ビクター（現JVCケンウッド）Z1-S

80年代のビクター製ADPに付属していた、比較的安価なカートリッジです。針はコニカル針です。一度も針交換をせず使い続けているとのことでした。

CDP：ヤマハ CD-S300

最近発売されたCDPで、現在（2018年8月）でも生産されている。定価は41,000円。ただ、発売当時は69,800円だったと記憶しています（私の記憶違いかもしれません）。

アンプ：日本ビクター（現JVCケンウッド）A-X5D

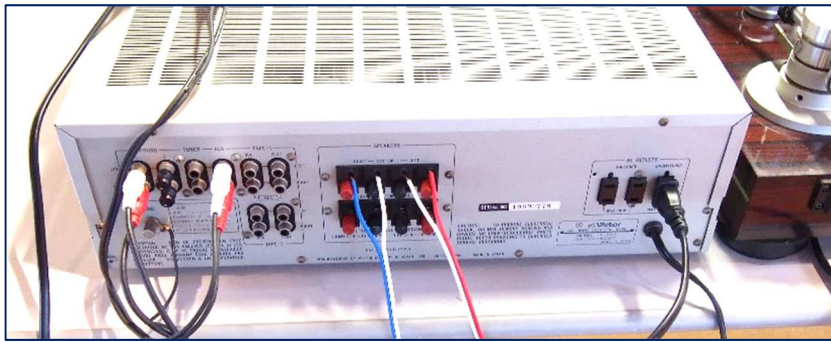
シンプルな回路を売り物にしたプリアンプ。1980年発売。定価は69,800円。最大出力75+75W。当時流行のノンカットオフ方式で、A級の音質とB級の効率を実現したというのが売り文句です。ビクターはこの方式を「Super-A」と呼んでいました。



シンプルかつセンス良くまとまったフロントパネル。価格以上の高級感を感じさせる。

トーンコントロールなどの使用頻度の低いスイッチやつまみは下部の蓋の中に収まっている。

上に乗っているのはパイオニアのBDプレーヤー。CDP代わりに使用された。



アンプのリアパネル。

RCA ジャックは金メッキされていない。スピーカー端子は、エントリーモデルでよく使われるプッシュ式。

スピーカー：日本ビクター（現 JVC ケンウッド） [型番なし]  
ビクターのシステムコンポのスピーカーだったとのこと（だから型番がない）。すべてコーン型スピーカー・ユニットで構成された 3 ウェイ・スピーカー。ウーファーは 30cm 口径とみられます。

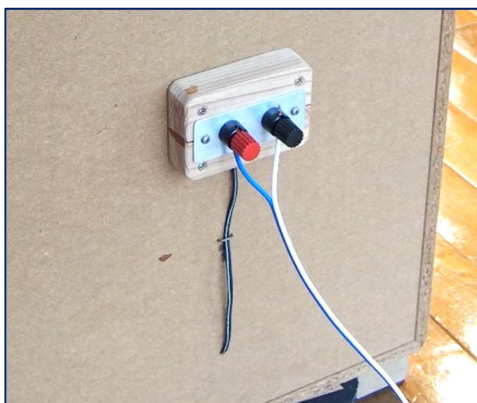


80 年代のスピーカーには珍しく、スピーカー・ユニットが縦一直線に配置されている。この時代は、スクーカー、ツイーターを左右いずれかにシフトしたデザインが流行っていたが、そのようにすると、音像がぼやけたり、定位が曖昧になったりする。コストを抑えるために、縦一直線の配置にしたのだろうが、そのことが音質面でメリットとなっている。

もう一つの流行であった、可変式アッテネーターも省略されている。これも音質面で有利。

スクーカーとツイーターの前後方向の位置は、ほぼ一致しているように見える。どちらもコーン型なので、位置を合わせやすくなっている。

コストを低く抑えるために、シンプルなデザインにしているが、そのことで高音質を達成している。「コストダウンこそ最良の音質向上対策」というのちの設計思想に通じるものがある。



背面に取り付けられた手作りの端子板。

元々端子はなく、ケーブルは直出しだったようだ。内部から引き出されているケーブルは、かなり細いものである。

スピーカー・ケーブル：日立電線 OFC ケーブル（型番不詳）

80 年代に流行した OFC スピーカー・ケーブル。確か、この日立電線のケーブルは、世界初の OFC ケーブルだったような気がします。

### 環境

耕心館は、古い養蚕農家の建物を改造して造った施設で、2階が多目的ホールとなっています。収容人員 70 名ほどのこごんまりとしたホールですが、木造建築らしい響きの良いホールです。

詳しくは、下記ホームページをご覧ください。

<http://www.koshinkan.jp/>

## 音質

初めてミュージック・トラベルのレコード・コンサートに参加したときに、衝撃を受けました。とにかくリアルな音で、本当に目の前で演奏しているのではないかと感じるほどでした。

その後も、耕心館で開催されたレコード・コンサートに何度か足を運びました。が、使用コンポーネントが替わったこともあり、最初の時ほど音質が良いとは感じませんでした。

以下の感想は、最初のレコード・コンサートで感じたことです。言うまでもありませんが、私個人の感想です。

レコード・コンサートの前半は、CDが使われました。ショパンのピアノ曲のCDです。タイトルは忘れてしまいましたが、ショパン・コンクール優勝者のCDだったと思います(コンディ・リカ?)。

まるで生演奏を聴いているような現実感がありました。実際、私は耕心館でピアノ・リサイタルを数多く聴いているのですが、目を閉じて聴いていると、目の前で本当に演奏しているのでは、と思わせるほどでした。

ピアノの音の再現は、オーディオ装置にとって、かなりの難題だと思います。ピアノの音は、近くで聴いてうるさくないのに、遠くまでよく届く不思議な音です。また、オーディオ装置で聴くと、本来の艶やかで、輝かしい音が、くすんで聞こえるということがよくあります。

この時聴いた音はピアノの生音にかなり近かったと思います。長年オーディオを趣味としている私でも、初めての体験でした。

後半はアナログ盤が使われました。

とてもクリアで、ストレートな音と感じました。ステレオ感もよく出ていて、定位も安定していました。

この経験は、私にはとてもショックでした。それまでは、本当のHi-Fiはマルチアンプ・システムでなければ実現できないと考えていたからです。

翌年(2015年)にスコーカー専用アンプのMA-215 Arabesqueを完成させ、Gaudiのグレードが一段上がったことで、ようやくやはりマルチアンプが良いという思いに戻れました。さらにGaudiの分析した結果、まだいくつかの問題点があることが判明しました。これらの問題点を解消すれば、さらなる音質向上が見込まれます。つまり、Gaudiにはまだ伸びしろがあるということです。

(Gaudiの未解決の問題点については、下記のページを参照してください)

「Gaudiの問題点」 <https://nobody-audio.com/problem.html>

かろうじて自分の信念を保つことができましたが、モノアンプ・システムで、かつ使用コンポーネントが30年ぐらい前のミドルグレードのシステムで、ここまでHi-Fiが実現できることを知って、色々と考えさせられました。

結局、「シンプル・イズ・ベスト」なのだと思います。ハイエンドモデルと違って、回路やメカがシンプルで、余計なものが加わっていないのが、音の良さの秘密だと思います。また、80年代の日本製オーディオ製品は、過剰品質といってもいいぐらい丁寧に作られています。上位モデルの良いところを引き継ぎ、あまり重要でない部分を切り捨てた設計になっていると感じます。

ミュージック・トラベルさんのシステムの音質が非常に良く感じられたのは、耕心館の音響が良いからとも考えられます。

しかし、音響が良くても、オーディオ装置の質が低ければ良い音にはなりません。やはり各コンポーネントの質が高く、システム全体でも音質劣化要因がなかったことが高音質につながったと思います。

## その他の高音質システム

オーディオ関連イベントなどで、これはなかなか素晴らしい、と感じたシステムがいくつかあります。ただ、オーディオ・ショウのような場では、自分の聴きなれたソースでじっくり試聴することはなかなかできない上に、最適の聴取位置で聴くことができないということもあり、本当の実力を評価することは難しいものです。

オーディオショップの試聴室を借り切ったり、空いている時間帯にジャズ喫茶に行ったりすれば、じっくり聴くことができます。しかし、そのような場で、特筆するようなシステムに出会ったことはありません。

若い頃は、私の技術も未熟だったし、Gaudiも未完成だったので、家で聴くよりずっと良い音で聞けるということで、よくジャズ喫茶でジャズを聴きましたが、現在は家で聴く方がずっと良い、という状況になっております。

## 真空管オーディオフェア2011で出会ったシステム

この時のメモを紛失してしまったので、記憶を頼りに説明します。その記憶もあまり確かではありません。もしかしたら、2009年の真空管オーディオフェアでの出来事だったかもしれません。

マックトンのブースに立ち寄った時、社長自らが製品のデモをしているところでした。実に良い音を聞かせていました。

アンプはマックトン社の最上級の真空管アンプで、チャンネルあたり8本の出力管をバラ接続したOTLアンプでした。スピーカーは社長個人が所有するタンノイの高級スピーカーでした。私は商品知識に乏しいので、機種名までは覚えていませんが、タンノイ伝統の15インチ、2ウェイ・コアキシャル・ユニットを使用したモデルです。

管球アンプとは思えないようなストレートなサウンドで、ソースに含まれる全ての信号を音として出力している、という印象でした。Gaudi 以外の管球アンプを使用したシステムで、このような印象を持ったのは初めてでした。

ただ、このアンプは一般住宅には設置できないような、超弩級のアンプです。やたらでかく、重く、発熱量が物凄いです。私には縁のないアンプです。

真空管オーディオフェアの会場である秋葉原損保会館は、古い建物で、各部屋は天井が低く、広くありません。音響的には全然良くないのですが、本当に優れたオーディオ装置の音は、そういう良くない環境の中でもその実力は分かります。

### インターナショナル・オーディオ・ショウ2003 で出会ったシステム

エソテリックのブースで出会ったシステムです。スピーカーはアバンギャルド DUO、アンプとプレーヤーはエソテリックの最上位モデルでした。

非常に生々しい音を出していて、特にヴォーカル物はまるで目の前で歌手が歌っているように聞こえました。イベント会場でこのような高音質のシステムに出会うことはめったにないことなので、驚きました。

アバンギャルドというメーカーのことは、新聞記事で知っていましたが、試聴するのは初めてでした。カタログにもっともらしい美辞麗句が書かれていても、宣伝文句通りの音を出すスピーカーはほとんどありません。私にとっては、これが初めての経験でした。

この時に、もう Gaudi の製作はやめて、アバンギャルドに乗り換えようかと本気で考えました。

しかし、翌年もう一度インターナショナル・オーディオ・ショウで試聴したところ、全然高音質に聞こえませんでした。某オーディオ／ジャズ評論家が経営するジャズ喫茶でも DUO を聴きましたが、かなりひどい音質でがっかりしました。

このスピーカーは、かなり広い部屋に設置しなければ性能を発揮しないことも分かり、結局アバンギャルドへの乗り換えはやめました。

なお、アバンギャルド社には TRIO という上位モデルもありましたが、こちらの方は最初からあまり良いとは感じませんでした。

## まとめ

私が試聴した様々なオーディオ・システムの中から、ベストのもの、それに準じるものをいくつか紹介しました。

私が良いと感じるシステムは、シンプルで、余計な機能、メカ、回路がなく、過剰な性能を追求していないシステムです。ミドルグレードの方が、むしろハイエンドよりも音質が良いように聞こえます。

セカンドベストなものとしては、ハイエンド・システムを挙げましたが、いずれもショウの会場で出会ったものです。自分が聴きなれたソースを聴かせてもらったわけではないですし、周りに人が大勢いて、最適位置で聴けたわけでもありません。じっくり聴きこめば、あらが見えてくる可能性はあります。

オーディオファイルが所有するシステムで、特別に感銘を受けたものは今のところありません。

そもそも、オーディオファイルの中には Hi-Fi を否定する人が多いと感じます。例えば、「Hi-Fi はつまらない。自分好みの音を作る方がよい」、「自分はオーディオ・マニアであって、音楽マニアではない」などおっしゃる方がいます。特に自作派の方の場合、音そのものよりも特定のメカや回路に対するこだわりがとても強い人が多いと思います(例えば、小口径ユニットを使用したバックロードホーン・スピーカーにこだわる、真空管アンプにこだわる、等々)。

そのようなオーディオファイルのシステムは、大概すごく個性的な音がします。ありていに言えば、癖のある音です。私としては、ちよつとなじめない音です。

中には個性の強いメインシステムの他に、**音楽を聴くための**サブシステムを組んでいる方がいます。私にはそちらの方がなじめます。

これも趣味の領域なので、自分好みの音をつくるという楽しみ方を否定はしませんが、私はどちらかというとオーディオ・マニアというより音楽ファンなので、Hi-Fi にこだわります。Gaudi II で真の Hi-Fi を実現したいと考えています。

[END OF DOCUMENT]

NOBODY Audio

とのちのオーディオルーム 補足資料